

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



森林が涵養した豊かな湧き水が大規模なワサビ田をささえ（静岡県中伊豆町筏場）

Contents

- 12年目を迎えた大同の緑化 P 2
- 高まる環境問題への関心（北京講演会報告） P 3
- 訪日団メンバーが見た日本 P 4
- 豊かな自然のなかで学ぶ（伊豆合宿報告） P 6

2003.1

89

12年目を迎えた大同の緑化

遠田 宏 (GEN顧問)

2003年を迎え、大同での緑化活動も12年目になりました。試行錯誤の連続であった初期の活動を経て、最近は失敗もすくなく計画も順調に進み、成果も目に見えるようになってきました。靈丘の自然植物園では以前は目立っていた斜面の裸地も灌木におおわれて目立たなくなり、標高の高いところではリョウトウナラやトネリコの仲間が勢いよく伸びはじめています。カササギの森も計画を上回るスピードで植林が進んでおり、隣接する采涼山植林地のマツも地元の熱心なサポートもあって順調に生育しています。植林後3~4年は頼りない姿をしている苗も、管理さえよければその後は根もしっかり張って年に20~30cmは伸び続け目立ってきます。苗を植えることも大変な労

働ですが、その後の管理は何年もつづくその何倍も大変なことであり、地元の人びとの理解と協力なしにはできることではありません。地元の人たちは緑化という共通目的を通して、その成功も失敗も共有し、形式的な友好でない心の触れ合いをこれからも大切にしていきたいと思っています。

大同でのこれから緑化を考えるうえで気になることは多々ありますが、やはり最近の異常気象と水不足は私たちには打つ手がないだけに心配なことです。近年の異常気象は世界各地から伝えられていますが、昨年の世界の平均気温は平年より0.58度も高かったそうです。昨年春の大同も異常に暖かく、例年より2週間以上も早く芽吹きがはじまり、アンズも早々に開花し、ツア

ーでお花見を楽しんだかたも多かったですですが、開花が早かつたぶん霜害の危険性は高く、その危惧は不幸にも当たって壊滅的な被害をうけました。昨年の黄砂の年間発生回数も記録的なもので、大同では例年なく2月から始まり3月20日には大同は視界500m以下の猛烈な黄砂におそれ、22日は日本各地に達し特に札幌は記録的なものでした。そのうえ11月12日というとんでもない時期に黄砂が日本まできました。長江以北の慢性的な水不足は中国の農業や工業をはじめ経済の「発展限界論」にまで話はおよび深刻なことです、大同では99年は50年に1度の旱魃、01年は100年に1度の大旱魃で農産物はもちろん、植林事業もおおきな影響をうけました。地球の北半球各地で続発する異常気象が、一時的な地球のきまぐれであってくれればよいのですが、なにか不気味なものを感じさせます。

2003 春の黄土高原ワーキングツアー

靈丘自然植物園での作業、村での植樹やホームステイ、さらに大同県のカササギの森や南郊区の環境林センターでの作業など、GENのワーキングツアーならではのメニューがもりだくさん。

経済発展著しい沿海部とはまったく違う中国黄土高原の農村で、草の根緑化協力の現場をお確かめください。

- 日程：3月24日（月）～31日（月）
- 費用：一般=17万円、学生=16万円（国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、ビザ取得費用、GEN年会費ふくむ）※中国国際航空利用 ※関西／成田空港発着（GENスタッフは関空発着便のみ同行）

●スケジュール（案。変更になる場合があります）

3月24日（月） 午後出発。夕刻北京着。バスで大同へ。大同泊

25日（火） 三嶺村、懸空寺をへて靈丘県へ。

26日（水） 灵丘自然植物園で作業。

27日（木） 小学校付属果樹園で作業。ホームステイ

28日（金） 大同県“カササギの森”

で作業。国営苗圃見学。大同市へ。

29日（土） 雲崗の石窟、万人坑見学。環境林センターで活動。歓送会。夜行列車で北京へ。車中泊

30日（日） 早朝、北京着。終日北京観光（自由行動可）。北京泊

31日（月） 朝、北京発。午後帰着

●定員：30人

●申込み締切り：2月17日（定員に達し次第締め切ります）

ご協力ありがとうございます

●子どもエコプロジェクト

WFWP大阪第9連合「子どものためのエコプロジェクト」より、17,900円の寄付をいただきました。マツの苗木4,475本分として中国黄土高原緑化活動に使わせていただきます。

活動日には、1時間の街頭募金活動をしてから出かけるとのこと。今年1年間の、緑の募金の街頭活動で集まつ

たなかからご協力いただきました。小学生、幼稚園児のみなさん、指導員のみなさん、ありがとうございました。

●国際ソロプチミスト奈良5クラブ

昨年12月、国際ソロプチミスト奈良5クラブより96,500円の寄付をいただきました。

94年春、大同へ緑化協力団を派遣していただき、以来毎年のご協力です。継続してのご協力に感謝します。

●青山さんご一家

青山周さんが、昨年他界されたお父さん（行雄さん）のご供養と思い出にと行雄さんとご家族のお名前で“カササギの森”にご協力くださいました。読売テレビ名誉会長だった青山行雄さんは長年にわたってGENの会員をつけ、私たちの活動を激励してくださいました。ありがとうございました。青山行雄さんのご冥福をお祈りいたします。





GREENなんでも勉強会 黄河紀行～その3・黄河源流域～ 報告

GEN顧問・小川房人さんの黄河紀行もいよいよ最終回で、源流域を見る。かつて、飛行機の高度計の間違いからエベレストより高い山と誤解されたアムネマチン（標高6,282m）も姿を見せてくれた。

清の時代まで1年のほとんどの期間氾濫していた黄河は、近年に水量が激減し、1972年から断流（河口まで水が届かない）という現象が起こる。この大きな原因のひとつは、前回見た中・上流域における灌漑農業によるものであり、地下水の汲み上げ規制を行った結果、2000年からは断流を避けることはできるようになった。しかし、水不足は深刻な状況にある。

もうひとつの原因として考えられるのは、源流域での降水量の減少である。温暖化等の気候変動の結果だと思われるが、雨の降り方も変化している。現地の人の印象を聞くと、降る量は変わらないが、降る頻度が減っているとのことである。一時に降ると地下水にならないで表面を流れ、蒸発する割合が増えるのだろう。

源流域の湖の水位も大きく低下している。最上流の源流には行けなかったが、水の湧き出す源流のひとつでは、やはり水量の低下が見られ、以前は水底だったところも歩けるところが広がっている。

中国は、西に行くに従って標高は高

くなり、2,200mと3,200mと4,200mに段々に平原が広がっている。標高3,200～3,700mのところにコノテガシワの森がある。日本では森林限界を超える高さで高木の森は考えられないが、大陸は事情が異なるようだ。

4,000mを超える源流域の平原では、菜の花と牧草が栽培されている。菜の花は油の原料、牧草は羊やヤクの食料になる。二条麦も栽培されている。ビールの原料だが、ここでは蒸留酒をつくっている。おみやげの現地の有名な酒を参加者で賞味させていただいた。エステルの香りのする美味しい酒だった。（川島和義）

高まる環境問題への関心

講演会『異質なものとして混じる』報告

吉富茉莉（北京環境ボランティアネットワーク）

北京環境ボランティアネットワークは、2000年から毎年12月に、GEN事務局長の高見さんをお招きして、北京で講演会を主催してきました。最初の2回はいずれも通訳なしで、日本人を主体に50人以下の参加者でした。3回目となった去年の講演会は、12月3日に日中友好環境保全センターのホールで150名以上の参加者となりました。

今回は北京市内の大学での宣伝や、ネット上で講演会参加者を公開募集したため、中国語の通訳も入れた本格的な講演会となりました。北京の各大学で勉強している学生、環境保護関係者、マスコミ関係者など多数駆けつけ、特に日本語の分からぬ中国人の参加が目立ちました。中国でも環境に関するボランティアに関心が高まっているものの、日本人のボランティア活動に対する機会が少ない関係者にとっては、92年から活動を開始した大同での緑化活動の地道な動きを知るチャンスとなりました。高見さんは「異質なものとして混じる」というテーマで、10年余

りに渡る体験と実感を通して、大同のカウンターパートとの協業を確立するまでの苦労と、日本人・中国人の違いを真摯に見つめる態度の重要性を語っていました。また、質疑応答では中国人からも積極的な質問、意見提起などがあり、日本人の環境活動に対する関心の高さが伺えました。日本人のワーキングツアーに対する関心も深く、現地での日本人のビヘイビアも見られていることも確かなようです。

北京では、学生の環境保護とボランティア活動に対する関心度が高く、当日運営に参画したスタッフには、20代の日本人留学生が多く参画され、講演会の企画と司会進行などを務めてくれました。

また、高見さんは、北京在住の人々が大同に植樹に訪れやすいように、今年の夏から「カササギの森」に蒙古パオを作るという計画を紹介され、北京の置かれている環境を大同から見つめ直す機会を持つよう会場の参加者に訴えました。

GEN自然と親しお会 『種から育てる』

会報に『植物を育てる』を連載中の立花先生に、実際に土づくりなどを指導していただきます。植物全般はもちろん、園芸や家庭菜園に关心のある方、またとないチャンスです。ぜひご参加ください。

- 日時：2月8日（土）10時～15時
- 場所：大阪市立大学理学部附属植物園（京阪交野線「私市」駅徒歩5分）
- 集合：午前10時に「私市」駅前
- 指導：立花吉茂さん（GEN代表）
- 参加費：一般500円、中学生以下200円（保険料含む。入園料一般350円が別途必要）
- 持ちもの：弁当、飲みもの、軍手。
※寒い時期の屋外での活動です。暖かい服装でおいでください。
- 小雨決行
- 定員：30人
- 申込：2月5日（水）までにGEN事務所まで



訪日団メンバーが見た日本 ～人、環境、森林～

『緑の地球』88号でご紹介したように、大同からの訪日団は無事研修を終えました。黄土高原とはまったく環境が違う日本で、何を感じ、学んだのか、大同の緑化にどう生かせるのか、武さんと侯さんに感想を送っていただきました。

訪日の感想

武 春 珍（緑色地球ネットワーク大同事務所所長）

2度目の訪日で、多くの場所を回りました。美しい日本は私に深い印象を与えるました。東京の林立する高層ビル、大阪の精巧な建築物、札幌の夢のような夜景、きれいに揃った道路、整然とした交通秩序、時間をお金のように大切にする仕事の効率……いたるところで日本の現代文明を感じ、同時に、日本人民が創造した現代の経済の奇跡を身近に体験しました。

しかし、印象が最も深かったのは、日本の環境です。日本では、山は緑で、田畠や野原は緑です。街路も緑です。至る所すべてに緑があります。緑が水源を作ったのか、豊富な水資源が緑を育てたのか、どちらなのでしょうか。

黄土高原で育ち、緑を渴望する一種の潜在意識があるからかもしれません、私は、日本で見た大自然の色彩が最も純粋だと思います。草木は青々として水がしたりそうだし、泉の水は透き通って底が見えるし、北海道の雪は真っ白だし……。

公園では人々が芝生に横になって自然との触れ合いを楽しみ、奈良の道では鹿が人間と一緒に自由に歩いています。人々は現代的生活の中で環境と調和をもって共存しており、これは日本の環境保護がすんでいることを示しています。

以前、日本に行ったことのある友人



緑豊かな日本の自然は素晴らしい

から、日本の自然環境の美しさが不思議で不可解だと聞いていましたが、2度の訪日で、その答えがわかりました。それは、日本人の強い環境保護意識です。私たちは多くの黄土高原緑化に熱心な緑の地球ネットワークの会員に会いました。東京では、宮下利江さんが「かささぎの森」のための募金活動をしました。北海道では、棟方鋼さんがずっと私たちの学习、見学に同行してくださいました。北海道大学雨龍研究林・天塩研究林の技術者たちは、雪が降るなか、労をいとわず研究林を

案内してくださいました。私はこれらすべてに感動しました。同時に、日本人の強烈な環境保護意識を体感しました。この意識はもはや自国の国土内だけに限りません。日本人、特に緑の地球ネットワークの会員のみなさんは、自然環境に対する人類の責任を早くから意識し、勇敢にこの責任を負い、環境保護のパイオニアとなりました。会員のみなさんの高尚、誠実、無私、勇敢、不屈の品格の中に、私は、人類が最終的に環境問題を解決する希望を見いだしました。同時に、「黄土高原緑化協力」という、困難で長い道を歩んでいこうという決意をかためました。

日本を訪問して

侯 喜（緑色地球ネットワーク大同事務所技術顧問）

2002年10月～11月のわずか十数日の日本滞在中、どこへ行っても深く感動し、大変勉強になりました。振り返ってみて、特に印象の深かったのは次の点です。

1. 日本の国民の素質が高いこと。つまり、日本の国民は高雅な文明の感じがあり、礼儀正しく、発言が文化的で、もてなしが温かく、仕事に忠実です。事業を大事にする精神があり、仕事のつらさをいとわず、気にかけません。

2. 居住環境が良いこと。訪ねたところはどこも建築が整い、清潔優雅で、裸の土地が無く、緑があります。空気が汚染されておらず、地面に雑物がなく、美しく感じます。北海道では、いくつの研究林に行きました。私は以前日本の森林被覆率が68%以上あると聞き信じられませんでしたが、今回自分の眼で見てみると、聞いていた通りでした。

3. 交通の秩序が良いこと。この十数日間に、車が道をふさいでいる光景も、交通事故も見ませんでした。国民が自觉的に公共の場所での秩序を守ること

が、各人の公徳になっています。

4. 飲食の文化において、消費が高くなく、儉約の習慣があること。公共のレストランでほとんど泥酔者を見かけず、食べ残しがテーブル一杯になっていることもありません。

5. 学習の感想。学習が私の主な任務です。私たちは北海道の天然林、研究林、東京、大阪のいくつかの植物園を見学しました。いずれも新鮮で、多くを学びました。とりわけ、樹木、花卉はいずれも亜熱帯の植物で、種類が多く、名前も聞いたことがないものもありました。造林の面では、私は日本の専門家と造林密度、配置、造林方法、造林樹種などいくつかの問題を検討しました。北海道の森林について言えば、年間降水量が1,500mm前後で、土壤水分が十分あり、湿度が高いという自然の気候によって、主に天然に形成されたものです。林分を構成する樹種は、カンバ、ナラ類で、場所によってはエゾマツが混じります。しかし、日本の技術者はこの林分林相に満足していません。というのは、これが生態型林業



天塩研究林のミズナラの大木の前で

にすぎず、彼らが求めているのが生態経済型で、森林に経済効率（直接的経済効率）を求めており、人為的作用によって、経済効率の高い樹種を混ぜようとしているからです。この観点は正しく、私は賛成です。

混植の構造においても、彼らの研究している帯状混交の方法に賛成です。メインの樹種は帯を広くし、サブの樹種は狭くしてメインの樹種の成長を助けます。つまり、メインの樹種のために一定の空間をとり、日照、肥力など十分な生育条件を与えてやります。ま

た、場所に応じてブロック状混交法も採用できます。メインの樹種の植樹数量を多くする必要があります。

植樹の方法においては、種子による繁殖以外に、2~3年の大鉢苗を育てて造林に使用すれば、植えた木はすべて成木し、自然損失を少なくすることができます。北海道は降水量が多いので、この方法も実現可能です。しかし、乾燥地域では旱魃の年には活着していた樹木も枯れことがあります。ですから大同地域での植樹には乾燥に強い造林技術を重点的に研究する必要があります。第一に、整地の仕事量を多くし、活土層を深くし、土壤の蓄水性能を高めること。第二に、根系の発達した苗木を育てる。第三に、乾燥に強い樹種、とりわけ地元の樹種を選択すること。第四に、幼林の撫育管理と保護を強化すること。第五に、条件が許せば、土壤の肥力を増加させること。

日本の林業技術者の仕事を大事にする気持ちには、大いに学ぶところがあります。彼らの実験林、実験室、標本



採集、保管、資料の蓄積など、いずれも大変詳しく、実物の標本も図も文字の説明もあります

私が最も残念なのは、造林のしかたについてあまり調べられなかったこと、人工林の育成についての交流が少なかったことです。乾燥地域では、自然更新には時間がかかり、何代にも、十何代にもわたってやっと完成することになります。しかし、この方法も必要です。先に人工でやり、そのあと自然による、あるいは、人工でやりながら自然でもやるというように、二本足で歩む方法を採用する、つまり、天然植生保護と人工植生発展を同等に重視する、これが緑化をスピードアップし、生態環境ができるだけ早く変える最善の道です。

いますぐできるGENへの協力～今年もよろしくお願いします～

昨年は懸案だった訪日団を3年ぶりにむかえ、ぜひ日本に来てもらいたかった大同のスタッフ全員の訪日を実現することができました。また、広島、岡山の写真展ではたくさんのボランティアのご協力をいただきました。

訪日の成果や今までの蓄積をいかして、今年も着実に前進していきたいと思います。みなさんのお協力でなりたつGENの活動に、いっそうのご支援をお願いします。

■会員になってください！

まだ会員になっていない方、ぜひ会員になってGENの活動を支えてください。また、環境問題や国際協力に関心をお持ちの知り合いに、会報の購読などをおすすめください。

■カササギの森にご参加ください！

1haの緑化費用5万円を一口として協力を募っているカササギの森へのご協力は、143ha分になりました。

現地では整地・造林が予定より早く

すすみ、いただいたご寄付に相当する面積を上回る勢いです。場所に応じて、マツ、トショウ、ポプラなどさまざまな木を植え、落葉広葉樹の試験栽培など、実験林場としても活用されています。みなさんのご協力をお願いします。

■緑化基金、運営カンパもとむ

金額はいくらでもけっこうです。みなさんの気持ちをわけていただけると嬉しいです。

■ビデオ『よみがえる森』ご購入を！

沙漠化、水不足など黄土高原の環境問題とGENの緑化協力を30分にまとめました。価格は5,000円、GEN会員価格は4,000円（送料270円別途）です。

■絵はがき『中国・黄土高原』をご利用ください

橋本紘二さんの写真で制作しました。『春』『夏』『秋・冬』『緑化』の4種類、それぞれカラー8枚組、1セット（8枚）500円（送料別）です。

■使用済みテレカを回収しています

使用済みテレカを換金して苗木代にあてています。現在、1枚でマツ苗1本分になります。対象は折れ、汚れのないテレカのみです。その他のカード、使用済み切手は集めていません。

また、使うあてのない未使用のテレカも大歓迎。

■書き損じはがきを集めています

書き損じはがきを回収して、通信費にあてています。そのほか、古い未使用のはがき、切手なども歓迎です。

■商品券などをお寄せください

ご家庭で眠っていて使うあてのない図書券、文具券、各種商品券がありましたらお送りいただけると嬉しいです。

■ボランティア募集

会報の発送、テレカの整理などの誰にでもできる作業が中心です。イベント参加時のスタッフの募集もあります。ボランティア可能な曜日、時間帯をご連絡ください。来ていただきたいときに、GEN事務所から連絡します。

植物を育てる (20)

立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)



●樹木の種子発芽

樹木と限らず野生植物の種子の発芽はたいてい遅く、不揃いで、低率でしか生えない。これは、生き残るために自衛策のひとつであると考えられている。筆者の実験データのうち、先号ではウルシ科の植物について記した。今回は野生のマメ科樹木についての結果を報告しよう。

●マメ科植物

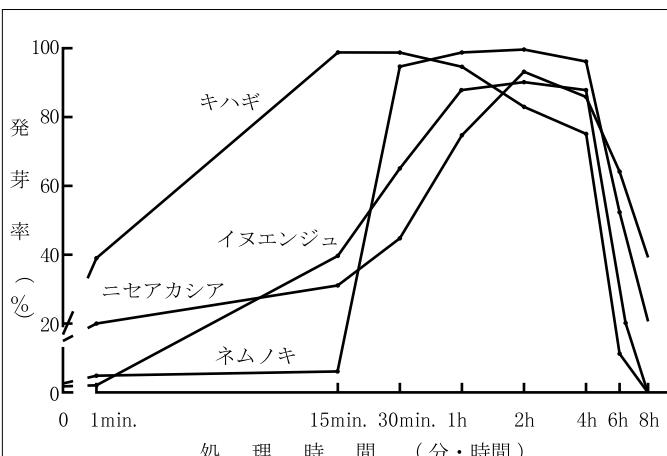


図1. マメ科植物4種の濃硫酸処理時間と発芽率との関係 H₂S0₄98%

ここでは緑化によく使われる4種類のマメ科植物について述べる。種子をそのまま蒔いたのではいずれも30%以下しか発芽しないが、濃硫酸で処理すると非常に促進された(図1)。すなわち、1分処理ではキハギはかなり促進されて40%、ニセアカシアは20%であったが、ネムノキとイヌエンジュはほとんど効果がなかった。しかし、15分～4時間の処理

でいずれも90%を超える高率で発芽した。6時間以上処理すると害があらわれ、発芽率は急速に低下した。

●キハギの種子発芽

キハギは種子の成熟度によって種皮の色が違う。それぞれの発芽のパターンは異なっており極めて興味深い(図2)。しかし各種の発芽促進処理をおこなうといずれも高率で発芽した。野生植物の種子発芽はこのキハギが示すように1種の同じ株からとった種子でも一様でないから、自然の回復作戦には周到な予備知識が必要である。

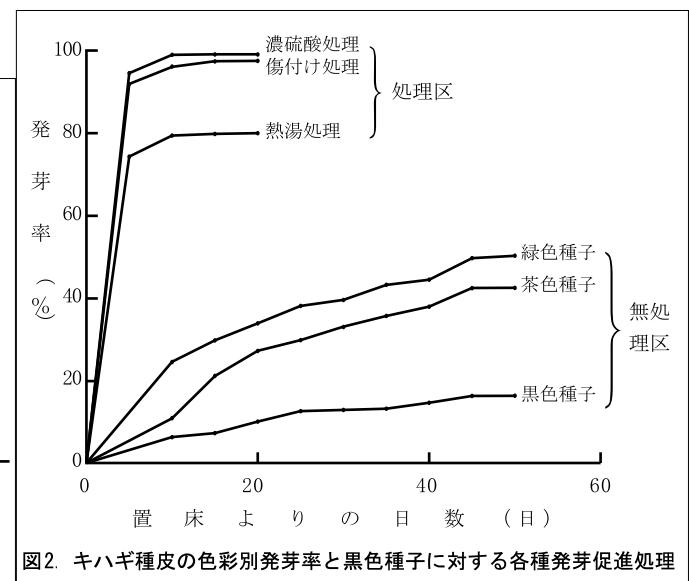


図2. キハギ種皮の色彩別発芽率と黒色種子に対する各種発芽促進処理

豊かな自然のなかで学ぶ 伊豆合宿報告

藤原 國雄 (高校教員)

4年前にGEN関東プランチ主催の「緑化リーダー養成講座」に1年間通つたのですが、上田信先生に「東京は遠くて通いきません」とお話ししたところ、「では伊豆で合宿をやりましょう」ということになりました。

伊豆半島西海岸の土肥町に私の勤務先の土肥高等学校があります。一方に海を望み、三方を山に囲まれた自然だけが豊かな所です。伊豆の自然と味を堪能してもらおうとフィールドワークをメインに企画しました。

12月7日は小雨模様のなか、15名が鉄道、車、船など思い思いの交通手段

で集合。2時半から始まり、上田先生の進行により、「自分と植物との出会い」をテーマに自己紹介を兼ねてそれぞれ最初に意識した植物を出しあいました。次に「もし自分が森を作るしたら…」というネイチャーゲームをしました。どのような木をうえ、どのような動物がいて、その動物をどのようにして養うのか、生態系から森を考える内容です。中にはライオンまで出てきました。餌はどうするのでしょうか?

休憩後、「見えてきた緑化の可能性」と題してワーキングツアーのスライドをもとに1999年、2000年、2002年の同

じ場所(遇駕山、董庄)の風景の違い、自然植物園で採取した植物の生育、カササギの森の川底の実生のボプラなどをレポートしました。最後に「表土について—土壤学概論—」のレポートを簡単におこないました。

夕飯は海の幸のみそ汁、七輪で焼いた天日干しの干物、自家製のブロッコリーのサラダ、新鮮な刺身の盛り合わせを本ワサビをすり下ろして食べました。特に刺身の醤油漬けと京菜の漬け物をごはんにのせお茶をかけて食べる「マゴ茶」が好評だったようです。

8日はあいにくの雨。車4台に分乗して仁科峠へ。ここは約1万年前に達磨山火山が噴火したあと、クマザサが稜線を覆い、他の植生が入ることのできない風景です。晴れ(次頁へつづく)

黄土高原史話 <11>

カササギはめでたき鳥と古詩にいふ

谷口 義介（摂南大学教授）

2000年、GENが立ち上げたプロジェクトXが“カササギの森”計画。

大同の技術者の希望とツアー参加者の要望がマッチして実現しました。

大同県聚樂郷で、約600haの土地の50年間使用権を購入。

谷底には細い流れがあり、ポプラやサージが自生。高いところは、標高1,400m余（遠望すれば点々と明代のノロシ台、足もとには各時代の土器片が散布）。

この直営林場だと、成果を焦らず気兼ねせず、「草を茂らせてから木を植える」こともできますし、これも直営の靈丘自然植物園から持ってきた落葉広葉樹のタネなどをまいて、試験栽培することも可能です。

ではなぜここは“カササギの森”と命名されたのでしょうか？

愛称を募集した結果だそうですが、名付け得て絶妙。

カササギはカラス科の鳥ですが、カラスよりやや小さく、尾は長く、黒と白とのコントラストも鮮やかな愛嬌者。中国語では普通「喜鵲」といって、縁

起のよい鳥とされています。語順が逆の「鵠喜」も、喜ごと・慶事の意味。

「鵠橋」つまりカササギ橋というのは、七夕の夜、織姫が恋人に会いに天の川を渡るとき、たくさんのかササギが並んで橋になった伝説から。“カササギの森”は、まさしく日中友好の掛け橋。

北中国では、村落付近の喬木に大きな巣を作り、よく目にする鳥ですが、3世紀中頃倭国を訪れた魏の使者は、「その地に牛・馬・虎・豹・羊・鵠なし」と報告しています（『魏志倭人伝』）。

今では佐賀平野に生息して、県の鳥にも指定。チョウセンガラス、コウライガラスとも呼ばれますから、朝鮮半島から来たのでしょう。

カササギといえば、嫌でも耳につく悪声。それでも中国では、「鵠報」といって、カササギが鳴くのはよい知らせ、と信じられているとか。

では、いつ頃からカササギは縁起がよいとされたのか？

三国鏡あたりから急に鳥の図柄が多くなりますが、それはおそらく文献に



いう「鵠鏡」。カササギの文様が吉祥の意味をもっていた証拠でしょう。

さらに遡ると、古代歌謡集『詩經』の召南（洛陽付近）の「鵠巢」という詩。西周時代後期、結婚の祝頌歌です。

これ鵠に巣あり、

これ鳩これに居る。

この子ここに帰（とつ）ぐ、

百両（輛）もてこれを御（むか）う。（第一章）

「鳩」はハトではなく、鳩鳩つまりカッコウ。自分では巣を作らず、ほかの鳥の巣を拝借するというチャックカリ者。その習性を嫁入りの祝い歌として利用したのでしょうか。

カササギはめでたき鳥と古詩にいふ

黄土台地に森ぞ創らん

（02年3月28日、カササギの森にて）

（前頁よりつづく）ていればその向こうに富士が、西は駿河湾の向こうに南アルプスが望めるのですが、クマザサの上にうっすらと雪が積もっていました。あわてて1999年に「全国植樹祭」がおこなわれた所に移動しました。1万人以上が参加した国家的行事の「植樹祭」も管理が悪く、枯死して抜き去



小雨模様のなか、万城の滝へ

られた木も多数あります。誰かが「まるで墓場みたい」と表現していました。

ここから中伊豆町・筏場のワサビ田へ。ここはワサビ田でも最大規模の場所。背後の山が涵養した豊かなわき水が年間を通してわき出るところ、谷筋に延々とワサビ田が続いています。木が果たす役割を実感しました。さらに車で地蔵堂の万城の滝キャンプ場へ。小雨模様の中、滝を見に行きました。この滝は流れの裏側からも見ることができるので「裏見の滝」といわれる所ですが、崖崩れのため立入禁止。その後天気は回復せず、原生林入り口まで移動したもののエスケープルートもないため、勇気をもって断念。「また来年」ということで修善寺駅まで皆さんをお送りして解散しました。

関東ブランチ月例会予告 水の悩みも大国～中国

●日時：2月22日（土）14時～18時

●場所：立教大学（予定）

●講師：高見邦雄（GEN事務局長）

※場所の詳細は未定です。お問い合わせ

せは2月以降に上田信さん（e-mail：

ueda@rikkyo.ac.jp FAX. 042-388-6642）

またはGEN事務所まで。

お詫びと訂正

『緑の地球』88号「関東ブランチから国際協力フェスティバル・環境フェスティバルにたち参加報告」の記事の筆者を藤沼潤一さんと記していましたが、ただしくは村瀬智之さんでした。間違をお詫びし、訂正いたします。



油彩・水彩 栄永大治良展

ヨーロッパ、中国、インドなどで取材し、95年には大同にも行かれた栄永大治良さんの個展が開催されます。

●日時：1月15日（水）～25日（土）
11時～19時（会期中無休）

●場所：ギャラリー繩〔しょう〕（大阪市中央区南船場2-10-30豊城ビル1F、TEL. 06-6245-7117 FAX. 06-6245-7118、地下鉄「長堀橋」駅下車クリスタ長堀北⑤出口から北へ200m）

地球環境市民大学校 地球環境問題総合講座 ヨハネスブルグ・サミットから 未来へ向けて

昨年開催されたヨハネスブルグ・サミットの結果をふまえて、残された課題と今後のNGO活動の方向性を提言します。詳しくはCASA事務局へお問い合わせください。

●日時：第1回：2月7日（金）
第2回：2月14日（金）
第3回：2月21日（金）

- 第4回：2月28日（金）
各回とも18時30分～20時30分
- 場所：エルおおさか（大阪市中央区北浜東3-14、TEL. 06-6942-1933 地下鉄谷町線・京阪「天満橋」駅から徒歩5分）
- 定員：80名（先着順）
- 受講料：2,000円（全4回分）
- 主催：環境事業団地球環境基金
- 協力：（特活）地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）
- 申込締切：1月24日
- 問合せ・申込み：CASA事務局「地球環境問題総合講座」（〒541-0041 大阪市中央区北浜1-2-2 北浜プロボノビル1F TEL. 06-6203-2050 FAX. 06-6203-2051 e-mail : casa@netplus.ne.jp）

六甲奨学基金のための 第6回古本市

六甲奨学基金のための古本市の季節です。基金の主な活動は、毎年5名の兵庫県下のアジア人留・就学生への留学金の支給と、留・就学生および家族などを対象にした日本語ボランティア教室の開催です。ご家庭に眠っている不要な本を役立ててもらいませんか。

●受付期間：3月1日～31日（必着）

●送付方法：直接持参または送料送り
主負担で送付

【注意】

- ・読む人の立場になって、汚れ・破れのひどいものはご遠慮ください。
- ・辞書大歓迎。絵本、マンガ、洋書可。
- ・雑誌、教科書、参考書、コンピュータ解説書、百科事典などは不可。
- ・価格設定はおまかせください。お送りいただいた本はお返できません。
- ※販売時に使用する手さげ紙袋も集めています。

【古本市ボランティア募集】

3月15日から5月15日までの古本市期間中のボランティアも募集。可能な日につき・時間を主催者まで郵便、ファックス、eメールでご連絡ください。

●送付先・問合せ先：（財）神戸学生青年センター 古本市係（〒657-0064神戸市灘区山田町3-1-1 TEL. 078-851-2760 FAX. 078-821-5878 URL <http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/> e-mail : rokko@po.hyogo-iic.ne.jp）

編集後記

本屋で棚の下段の書名が見にくいので眼鏡を作ろうと視力を測ったら0.2以下。でも読書もパソコンも裸眼でOKなので、せっかく作った眼鏡もほとんど出番なし。目ってえらい！（東川）